

山口 祥 義



対談場所：新喜楽（東京都中央区築地）

林 真 理 子



明治維新150年記念 新春特別対談

佐賀の誇りを 未来につなげる。



「凌風丸絵図」佐嘉神社 所蔵

明治維新から150年の節目となる2018年がいよいよ幕を開けました。新春特別対談としてNHK大河ドラマ「西郷どん」の原作者である小説家・林真理子さんを迎え、佐賀藩が明治維新において果たした役割や、今年3月に開幕する「肥前さが幕末維新博覧会」について山口知事と語っていただきました。

維新期の佐賀が 果たした役割は大きい

知事：新年あけましておめでとうございます。ここ（東京都中央区築地の料亭「新喜楽」）は、大隈重信の邸宅跡に建てられたそうです。ご存じでしたか？

林：直木賞の選考会場になっていますが、大隈ゆかりの場所とは知りませんでした。大隈重信はすごく弁が立つ新しい時代の政治家で、西郷隆盛が嫌っていたように薩長の古いタイプの政治家とは合わなかったとのことですね。

知事：大河ドラマの原作を手掛けられている林さんに、幕末の佐賀はどう映っていますか？

林：佐賀藩には鍋島直正という名君がいました。薩摩藩主の島津斉彬が反射炉を造るときに「佐賀にできて、薩摩にできないことはない」と直正を見習

うなど、先進性があったと思います。

知事：斉彬は「西洋人も人なり、佐賀人も人なり、薩摩人も人なり。屈することなく研究に励むべし」と話したといわれていますね。でも、佐賀藩が先に反射炉を作ったことは、佐賀県民にあまり知られていません。

林：明治維新で佐賀が果たした役割はとも大きいと思います。大隈重信をはじめ、近代的な司法制度を整備した江藤新平など、多くの人材を輩出しました。江藤はすごく頭が良くして未来が見えていた人。「西郷どん」にも登場しますが、調べれば調べるほどすばらしい経歴を持っていると感じます。特に、副島種臣の書は素晴らしく、文人としてあれだけの才能を持つ政治家は現代には見当たりません。すごく知的でいいイメージがあります。

知事：林さんは、副島推しなんです（笑）。ほかにも、漢詩や画に優れた儒学者であり、教育者であったという草



佐賀県知事 山口 祥 義

場佩川も多彩な才能の持ち主ですごくいですよ。

林：直正の業績ももっとみなさんに知ってほしいですね。佐賀にそのような偉業の跡は残っていないのですか？

知事：反射炉を含め、佐賀には当時の業績を示すものがほとんど残っていません。佐賀は素晴らしいことをやっても、そこにとどまらず、すぐ次へと向かう合理的な面があります。過去を振り返ることなく前に進んできたので、佐賀の誇るべき功績が知られないままになっています。今年の3月に開幕する「肥前さが幕末維新博覧会」では、幕末・維新期の偉人や偉業の歴史を掘り起こしたいですね。

林：それは素晴らしいことですね！「肥前さが幕末維新博覧会」ではどのようなことをするのですか？

知事：佐賀の偉人、そして偉業を知ること、県民の皆さまに佐賀を誇りに思ってもらいたいという狙いがあります。

例えば、佐賀といえば「葉隠」をイメージする人が多いと思いますが、その教えを伝える「葉隠みらい館」を設けます。実は、「葉隠」には現代にも通じるような処世術が書かれているんですよ。

地域の歴史や資源を 未来へ活かして

林：全国への佐賀の魅力発信にもつながりそうですね。佐賀は魅力がコンパクトにギュッと詰まっています。お寿司や佐賀牛など食べ物もおいしいし、それに焼きもの。女性が好きなものがいっぱいあります。

知事：佐賀には玄海と有明海の2つの海があつて、それぞれの異なる海の幸が楽しめます。寿司ネタのコハダは佐賀産が築地の取扱量全国一です。また、大川内山や御船山など、魅力的なところ



小説家 林 真 理 子

1954年、山梨県生まれ。1982年エッセイ集「ルンルンを買っておうちへ帰ろう」が大ベストセラーになる。1986年「最終便に間に合えば」「京都まで」で直木賞を、1995年「白蓮れんれん」で柴田錬三郎賞を、1998年「みんなの秘密」で吉川英治文学賞、2013年「アスクレピオスの愛人」で島清恋愛文学賞を受賞。そのほかの著書に「不機嫌な果実」「野心のすすめ」など多数。

「築地反射炉絵図」公益財団法人鍋島報効会 所蔵